唐史叢鈔

石田幹之助著

昭和二十三年十二月　東京要書房發行
A5版　三八六頁　定價三三〇圓

石田さんと私とは私が大學在學中、東洋文庫の創立以來舊い馴染みである。その石田さんから昨年秋頂いたのが此の「唐史叢鈔」である。同氏は永年東洋文庫へ勤務された關係から書誌學の權威者であることは申す迄もないが、唐代史殊にその文化史に造詣の深いことは有名である。そこで本書に收められた十六篇も大體此の兩系統の項目から成り立つてゐる。前者に屬するものは「昔、支那で出來た外國語辭書に就いて」「東洋に關する稀覯書の話」「米國に於ける中國研究」などであり後者に屬するものは「唐代風俗史抄」「唐代燕飲小景」「唐代の紙に就いて」「唐代の婦人」などである。その他西域關係の題目として「中央アジアの古文化」「橄欖と葡萄」「支那西域發見の木簡に就いて」などが收められてゐる。

中でも「唐代風俗史抄」は本書の約四分の一をしめ、元宵觀燈・拔河・繩技・字舞・長安の歌妓などの項目を含み同氏の最も得意とする部門である。

綱引卽拔河が唐代の宮廷で廷臣宮女の間に盛んに演ぜられた遊戲であることは當代の記錄にも見え興味深いことである。殊に玄宗皇帝は之を娛しむだ樣である。

拔河は梁代の荊楚歲事記には拖鉤と見え、又古く牽鉤とも稱せられたが唐代には專ら拔河と稱せられた。然し何故に拔河と云はれたか明かでないと石田さんは云ふ。

私は唐代に殊に西域との交通が盛んであつたことから考へて、之は何か西域語殊にイラン語邊りで解釋がつくのではないかと思ふ。

ともあれ本書は中國文化史を學ぶ人に是非一讀を勸めたい。殊に論文風でなく隨筆風に書かれてゐることは一般の人々にも分り易いものである。

（駒井義明）